

## 令和2年度京都市総合教育会議 会議録

- 1 日 時 令和3年1月21日 木曜日  
開会 10時00分 閉会 11時20分
- 2 場 所 京都市役所北庁舎 4階 第一応接室
- 3 出席者 京都市長 門川 大作  
京都市教育長 在田 正秀  
京都市教育委員会委員 奥野 史子  
京都市教育委員会委員 星川 茂一  
京都市教育委員会委員 笹岡 隆甫  
京都市教育委員会委員 野口 範子
- 4 関係者等 京都市副市長 村上 圭子  
京都市総合企画局長 下間 健之 ※オンライン参加  
京都市子ども若者はぐくみ局 はぐくみ創造推進室長 上田 純子 ※オンライン参加  
(久保子ども若者はぐくみ局長代理)  
京都市教育委員会教育政策監 稲田 新吾  
京都市教育委員会教育次長 東 元彦  
京都市教育委員会総合教育センター所長・指導部長 佐藤 卓也

※ 出席者のうち、局長級のみ記載。

5 傍聴者 2人

### 6 議事の概要

#### (1) 開会

10時00分、門川市長が開会を宣告。

#### 【門川 市長】

経験したことのないコロナ禍の中、「一人一人の子どもを徹底的に大切にする」との理念のもと、子どもたちや家庭・地域との連携や京都ならではの学校運営協議会の取組、企業やNPOとの協働的な取組を進めていただき感謝申し上げます。

本市の厳しい財政状況の中、市民生活を守るため、7度にわたる補正予算を組み、中小

企業、小規模事業者、文化芸術関係者など、厳しい状況に置かれている業界や関係者に対し、支援を行ってきた。とりわけ、教育分野では、コロナ禍においても、子どもの学びを止めないため、各校の人的体制の充実に向けた学習指導員や校務支援員の人的体制の整備、一人一台PC端末の加速度的な整備等を予算化してきた。

コロナの厳しい影響により、貧困、孤立、格差など、さまざまな社会的課題が顕在化・加速化し、ますます先行き不透明な時代を迎えている。一方で、新型コロナウイルスをきっかけとして、GIGA スクール構想等、学校現場においても、これまでにないスピードで新たな学びの環境整備が進んでいる。

令和3年度はGIGA スクール元年度となる。飛躍的に向上したICT環境を有効に活用し、子どもたち一人一人の能力を伸ばすとともに、集団的な学びの場を構築することが重要である。また、学級閉鎖や学年閉鎖等になった際もICT活用により、学びの保障が可能となる。一方で、家庭状況や学校の指導体制など、子どもたちを取り巻く様々な環境の違いが、新たな学力格差を生む結果となつてはならない。

GIGA スクール構想による授業改善、教育活動の充実をいかに図るのか。また、集団宿泊活動、茶道・華道等の伝統文化体験活動等、これまで本市が大切にしてきた体験的・協働的な取組の重要性を再確認し、新しい生活様式の下でいかに充実していくのか。本日は、ウィズコロナ時代における京都ならではの学校教育について、様々な視点から忌憚のないご意見をいただき、意見交換を行いたいと考えている。よろしくお願いする。

## (2) 意見交換

### 【事務局】

意見交換を行うにあたり、教育委員会事務局 佐藤総合教育センター所長から本市のGIGA スクール構想及びICTを活用した教育実践、今後の方向性について説明させていただく。

### 【教育委員会事務局 佐藤総合教育センター所長】

まず、「1 コロナ禍での学びを止めない取組」について、令和2年3月5日から、5月末までの長期にわたる学校休業中の取組をご説明する。

当初、週1回程度の家庭訪問と学習課題の配布から始まったが、学校のホームページでの多様な学習教材の発信、ZOOM等の活用など、各校において様々な工夫のある取組がなされた。また、教育委員会としてもスタンダードとなる教材作成や、KBS京都での特別教育番組、京都新聞ジュニアタイムスでの特集と、学校や企業等、様々な方のご協力をいただきながら、「子どもたちの学びや育ちを止めない」取組を展開してきた。9月からは、各校にGIGA スクール構想に係る端末が1学年分入ったため、臨時休校や学級閉鎖の際にはGIGA 端末を用いたオンライン授業の取組も行っている。この間、苦しい期間であった

が、様々な取組を通して「学校のチーム力が上がった」、「行事を改めて見直す契機となった」という声があがっている。

次に、GIGA スクール構想についてご説明する。GIGA クール構想は、一人一台の端末等、ICT 環境を整備することで、誰一人取り残すことのない、公正で個別最適化された学びの実現を目指すものである。デジタルトランスフォーメーションや Society5.0 時代の到来など、これから社会構造や雇用環境の変革など、社会は大きく変わっていくが、これからの子どもたちには、そのような社会の中で必要とされる資質・能力を育んでいかなければならない。すでに、家庭環境によって ICT 環境の差が広がっているのではないかと指摘もあり、GIGA スクール構想の一人一台端末はすべての子どもに資質・能力を育むために非常に大切なものだといえている。

本市教育は「一人一人の子どもを徹底的に大切にする」という理念のもと、力を尽くしてきたところであるが、家庭状況の多様化、発達障害や日本語指導が必要な子どもなど、多様な課題を抱える子どもたちに対して、更なる ICT の活用によって、より一人一人に、きめ細かな教育活動が展開できると期待している。また、ウィズコロナ時代において、ICT により、より効果的な授業を実現することや、従来から目指している、子ども一人一人の学び・育ち、さらには子どもたち同士や大人との協働の学びを充実させるためにも大変有効なツールであると言える。

本市の ICT 環境の整備状況についてである。一人一台のタブレット型コンピュータについては、小 6・中 3 及びインターネット環境のない家庭分は 9 月末までに納品済みであり、残りの全児童生徒・教職員分は 3 月末までに納品予定である。Microsoft365 が利用可能で、Word, Excel, PowerPoint だけでなく、オンライン会議が可能な Teams, アンケートや簡単なテストが作成可能な Forms というソフトが使用できる。調べ学習でインターネットに接続するだけでなく、即座に子ども同士で意見や作品を交換したり、先生に提出できたりするように、高速大容量の通信ネットワークを 3 月末までに順次整備する。また、児童生徒の作品や教材を大きく提示する大型テレビ、タブレット充電用の充電保管庫、オンライン学習などで使用する Web カメラ等を整備する。

さらに、教育委員会の指導主事等が、総合教育センターや各所属において、学校と同じ環境で GIGA 端末を使って授業改善の支援や指導を行うために、また、子どもたちが、花背山の家や科学センターでの学習でも、タブレットが活用できるように教育委員会各所属の ICT 環境の拡充も行う。

一人一台のタブレット型コンピュータや大型テレビへの更新、高速大容量の通信ネットワークはどのように学びを変えるのか。

まず、一斉学習については、黒板の使用が主だったが、大型提示装置を使うことで学びが深化し、意見の即時共有や、動画や音声による学習理解が可能となる。すでに、本市では大型提示装置は当たり前になっているが、今回、さらに大きく見やすくなる。

次に、個別学習については、全員が同じ内容のプリントなどの課題が中心であり、与え

られた課題というイメージになりやすかったものが、デジタル教材や自分の学習進度に応じた出題がされるデジタル学習ドリルが開発されている。自分の興味や理解度に応じて、学習を進めることができるため、自分に合った学びを自分で考えることができる。また、データとして集積される学習履歴を教員が適切にアドバイスをするところにも有効である。本市もこのようなデジタル学習ドリルの導入について検討しているところである。

次に、協働学習についてである。現在も、グループで話し合い、まとめた意見をホワイトボードに書き、前の黒板にホワイトボードを貼るといった話し合い活動が行われているが、児童生徒の話す量に差がある。学習支援ソフトを活用すると自分が入力した意見や図をグループ内で交換できるため、より積極的に多様な意見を共有しやすくなる。発表や話し合い活動のほかにも、協働の作品制作や遠方の人との学習も可能になる。

GIGA スクール構想により全く新しい学習が始まるのではなく、これまでの教育実践に ICT を活用することで更に学習が充実することを目指している。子どもにとっては学習活動の充実・多様化であり、教員にとっては新学習指導要領で目指すところの主体的・対話的で深い学びの授業改善を進めることができる。

続いて、多様な子どもたちへの ICT 機器の可能性についてご説明する。読んでいる箇所を示しながら音声で読み上げるマルチメディア教科書や漢字のルビ振り、画面拡大など、特別支援教育を必要とする児童生徒や、日本語指導等を必要とする外国人児童生徒に対して、ICT 機器の機能を生かしてさまざまな場面で学習を支援できる。また、ICT には空間や時間の制約を超えるという特性があり、不登校児童生徒への授業配信やデジタル教材を活用した学習、Web 会議ツールを活用した登校支援など、可能性が広がってきている。実現しているものも多くあるが、今後、更に広げていきたいと考えている。

本市の目指す子ども像は「伝統と文化を受継ぎ次代と自らの未来を創造する子ども」である。例えば、京都ならではの体験的・協働的な活動として、茶道や華道などの伝統文化体験学習や花背山の家などの自然体験活動があるが、それらの活動においても ICT 機器を活用すれば、より効果的な学習を進められる。また、引き続き研究が必要であるが、話し合い活動において自動的に音声テキスト入力されるシステムや、学力や人間関係を考慮したグループ編成システムに関する実証研究を産学公連携で進めている。

これまでの教育実践と ICT の活用を効果的に融合し、より高い学びに向け、子ども同士、そして人や社会とのつながりを大切にしつつ、ウィズコロナ時代における個別最適な学びの実現を目指してまいらる。私からの説明は以上である。

#### 【在田 教育長】

令和3年度は GIGA スクール元年度である。一人一台 PC 端末をいかに活用するか、また、これまで本市が大切にしてきた体験的・協働的活動とどのようにミックスするかが重要である。さらに、「教え育む」という教師目線の取組から、子どもが協働的な学びの中で、自ら「学び育つ」という教育観の転換が必要である。この間、教育委員の方々には祥栄小

学校の実践を、市長には葵小学校の実践を見ていただいた。学校現場での活用状況も踏まえ、令和3年度に推進すべき取組等について議論してまいりたい。

#### 【奥野 教育委員】

2回目の緊急事態宣言が発令され、子どもを登校させることに後ろ向きである一方、登校させないと学習が遅れることに不安を抱く保護者がいた。GIGAスクール構想はそのような家庭に対する学習保障の点でも活用できるものでもあるため、端末を家庭に持ち帰ることができる環境を早急に整えていただきたい。

また、端末を使用するにあたり、最初は子どもがログインすることに非常に時間がかかるなど、0から1にすることが大変だと思うが、ICTが苦手な教員にも頑張ってもらい、対応していかなければならない。

新型コロナウイルス感染症の影響により、これまでやらなければならない潜在的な課題が一気にあふれ出てきてしまったが、この大変な状況をチャンスと捉えて、教員の皆様にも尽力いただき、京都の子どもたちのためにICT活用を推進していただきたい。

私自身はスポーツを通じてオンラインで様々な人と情報共有をしている。4月の緊急事態宣言の際に、京都でシンクロをしている子どもたちがスペインのナショナルチームの子どもたちとオンラインで一緒にトレーニングを行ったが、コミュニケーションは難しい部分があったものの、子どもたちにとって非常に貴重な経験となった。このように、新型コロナウイルスを機に、ICTを用いて京都の子どもたちと遠くにいる人や多様な人とをつなげることができると考えている。

急速にICT化が進んでいるが、花が成長するプロセスを観察したり、走ってしんどいと感じたりするなど、リアルの部分とICTを上手に融合することが大切である。祥栄小学校でも、自分で育てた花を写真に撮り、その写真を用いて教室で考察するといった授業を進められていたように、有効にミックスして取り組んでいただきたい。

また、運動不足にならないよう、感染症対策として距離を保ちながら、自然体験などの屋外での活動が増えればよい。大人からの強制ではなく、遊びの中で体を楽しく動かしながら、子どもたちが主体性をもってルールを作るなど、運動を通じて創造性を育んでいただきたい。

新型コロナウイルスは世界中で大きな課題となっており、人類で乗り越えていかなければならない危機的な状況であり、新型コロナウイルス感染症から派生される物事には、これまでの常識にない考え方をしなければ打ち勝てない。授業の中でも新型コロナウイルスを教材として活用することを進めていただきたい。

#### 【野口 教育委員】

昨年度、指定都市教育委員会協議会に出席した際、萩生田文部科学大臣が「1人1台端末環境を実現する」と宣言されたが、他都市の教育委員との意見交換で、ICTに詳しい人

がいなかなければなかなか推進していくことは難しいのではないかという話をしていた。そのような中、新型コロナウイルス感染症が拡大し、一挙に GIGA スクール構想が進められこととなった。私が所属する大学でも 4 月は大混乱だったが、できることを取り組んでいくしかないという覚悟を決め ZOOM で双方向の授業を行ってきたところである。これらの経験を踏まえると、ICT を進めていくためには、困ったときに対応できるよう、各校に ICT スキルが高い教員が少なくとも 1 人はいる必要がある。本市でもハード面は整いつつあるため、今後、ソフト面を充実させるために、各校の代表者が参加する ICT 活用に係る研修を開催し、代表者が各校に持ち帰って研修内容を広げていただくことが必須である。

#### 【在田 教育長】

教職員研修については、昨年からは基盤ソフトとなる Microsoft365 の研修に全校から参加いただくとともに、各学校の中核となる教職員や管理職を対象に、GIGA スクール構想のビジョンや 4 月までに必要な準備等についての研修を行っている。また、最低でも学校と同じレベルで使用できる状態でないと学校へ指導・助言等できないことから、1 月以降は事務局向けにも研修を実施している。引き続き、重点的に教職員研修等を進めていく。

学校体制については、来年度から新たに GIGA スクール推進主任を各校に 1 人設置し、学校の中で比較的 ICT スキルの高い教員に学校全体の教育情報化を牽引していただく。また、GIGA スクール推進主任をリーダーとする GIGA スクール推進委員会を設置し、授業のみならず校務支援においても ICT を活用し、働き方改革につなげられるよう、効果的・効率的に校内の情報化を推進していく。

#### 【笹岡 教育委員】

ICT を活用するにあたって、担任以外に児童をサポートする教員が配置されていれば、比較的スムーズに授業が進行すると思うが、担任 1 人で教える場合は、PC 端末の操作や困りを抱える子どもへのサポートに時間を取られるなど、教員の負担や授業進行に支障が生じるのではないかと。教職員 1 人 1 人のスキル向上も必要であるが、支援員の配置など担任のサポート体制の構築も検討すべきである。また、子どもの ICT スキルについては、習うより慣れよで、タブレットを使用することで向上していくと考えるが、一方で、PC 端末の中毒性や依存性など、負の側面に対する対策等を考えていくべきである。

伝統文化体験については、対面指導が難しい場合、オンラインでも続けることが大切だと考えている。実際に、京都市外の学校ではあるが、花材を学校に送付し、ZOOM とパワーポイントを使用してオンラインで授業をしたことがある。その際は、学校側はタブレット 1 台で教室を映していたため、1 人 1 人の作品を講評することができなかったが、今後、1 人 1 台端末となれば児童生徒の作品を個別に評価することも可能であるため、よりよい授業の展開を期待できる。一方、我々が伝統文化体験で伝えたいことは技術ではなく「心」であるが、オンラインでその点を伝えられるかどうかが非常に重要な視点であり、講師側

の教える力の向上が課題となっている。また、伝統文化を伝える役割を担っていただいている方は ICT になじみのない世代でもあるため、ICT を活用いただけるような仕掛けやサポート等も必要だと考えている。

自然体験活動等について、私も奥野委員と同じく、遊びの中での体験が重要であると考えており、外での活動時間は保障すべきである。今年度、VR で修学旅行を実施した滋賀県の学校があったが、想像以上に子どもが楽しんでいた。リアルな体験がベターではあるが、オンラインでできることの良さを軽視してはならず、教育活動の意義があるのであればオンラインでの実施も選択肢として考えるべきである。

#### 【在田教育長】

祥栄小学校を視察した際も、タブレットを使用するにあたって、複数の子どもたちが先生を同時に呼び、順番待ちをしていた場面も見受けられ、ICT 支援員の配置が必要であることは実感している。高学年であれば、子どもたちが互いに教え合うことも可能だと考えている。

体験活動については、直接体験することが重要であると考えているが、それができない場合の在り方について、引き続き、検討してまいりたい。

#### 【星川教育委員】

新型コロナウイルスは世界に大きな影響を与えているが、GIGA スクール構想の前倒しや来年度からの小学校での 35 人学級の年次計画的な実施など、教育界にとって非常に大きく前進する年でもあったと考えている。本市の「一人一人の子どもを徹底的に大切にする」という教育理念を教職員が実践できるよう、環境整備等を含めて支えることが教育委員会の大きな役割である。様々な課題を抱えている子どもたちを大切にしながら学習等を進めるには、ICT はなくてはならないツールである。しかし、諸外国では学校だけでなく家庭でも ICT を学習のために使用している一方で、日本では諸外国と比較して ICT を用いた家庭での学習時間が少なく、SNS やゲームの使用時間が多いという結果が出ている。今回の GIGA スクール構想による一人一台端末の整備により、学校での ICT 活用が前進するが、家庭学習での活用も含め、効果的な ICT 活用の在り方について研究していただきたい。

GIGA スクール構想が学校にどのように受け止められ、推進していくのか不安な部分もあったが、視察した祥栄小学校では若い教職員が中心となって取組を進められており、GIGA スクール構想の全体像をしっかりと把握されるとともに、ICT を活用したほうが効果的な学習場面や、ICT の活用を目的化するのではなく、これまでの指導方法とベストミックスする形で教育活動を展開することの重要性について理解されていた。

一人一台端末をどのように活用するのが子どもにとって最も良いのかということを検討することにより、ICT の活用が早く普及するのではないかと考えている。本市における先進的な取組も早急に全市に広げていただきたい。

ICT 活用の取組等を推進するにあたり、若い教職員が活躍することにより学校が活性化する点も期待している。

【在田 教育長】

ICT を活用する場面設定は非常に重要であり、全教職員がそれについて共通理解し、実践できるよう、現在作成している京都市スタンダードに ICT を活用する場面を設定し、記載することとしており、内容を充実させていく。

【門川 市長】

京都市においても教育においても、これまで、危機の時に人が育ち、組織が活性化し、まちづくりが前進してきたが、今できること、やらなければならないことを徹底して取り組んでいかなければならないことを改めて実感している。とりわけ、多様性が増している中で、ICT を活用することにより本市の教育理念である「一人一人を徹底的に大切にする」ことが一層可能になると考えている。

先日、ICT を活用した授業を拝見したが、筆記用具と教科書に加えて、タブレットを机に出すことにより、机のスペースに余裕がなくなるという新たな課題が生じていた。また、ICT 支援員の配置についても永続的に必要とは思わないが、特に端末の導入時には必須であると実感した。

また、リアルの良さをオンラインで、オンラインの良さをリアルで活かすということが重要であるとともに、ICT を活用し、姉妹都市の学校と簡単に交流できるようになると考えている。

さらに、ICT の活用により、採点の簡略化等による時間短縮などの教職員の働き方改革や教職員自身の深い学びにもつなげるとともに、教職員が児童生徒と向き合う時間を確保するため、仕事量だけが増えることのないよう文科省にも要望していく必要がある。

【村上 副市長】

私も新型コロナウイルスがもたらした影響は悪いことばかりではないと感じている。GIGA スクール構想により、教職員が児童生徒へ教えることから、子ども同士が教え合うことに重点が移っていくなど、学びの場がフラットになることは非常に大きなことである。また、学びの多様化が進んだことで多様性を受け入れる素地ができたと考えており、人と違うことにより疎外感を感じたり、場合によってはいじめられることが問題となったりするが、今後、そのような課題が解消されることを期待している。

ICT は新しいツールであり、便利なものほど副作用に注意が必要という話があったが、刃物や火を使うのと同様に、実際に使うことで注意点等が明確になってくると考える。教職員にはその点にも気を配りながら指導いただきたい。

【在田 教育長】

ICT の活用の在り方や課題点等についてご意見いただいていたが、京都ならではの体験活動も大切だと考えており、その点について将来展望も含めてご意見いただきたい。

【笹岡 教育委員】

本市では、市立小・中学校のすべての児童生徒が中学校卒業までに茶道・華道を体験できるよう段階的に取組校数を増加させながら全校実施を目指すなど、子どもたちが伝統文化やいのちに触れる時間を設けていただいていることはありがたい。今年度は新型コロナウイルスの影響で、取組校数は増やさずに、令和元年度実施校の継続実施のみとされているが、伝統文化を体験するのとしらないのでは全く異なると考えており、厳しい財政状況ではあるが、当初予定通り全校実施に向けて引き続き取組を推進いただきたい。

華道で言えば、花と向き合い、家に持ち帰り、花が朽ちるところまでをしっかりと見届けることで、命に向き合うことができるとともに、それらを経て生き方にも影響を与えている。人間と自然は対立する存在ではなく、人間も自然の一部であり、生け花を通じて自然との距離感を子どもたちが感じることで、今後、社会で生きていくにあたっての何らかのヒントを得ることができると思っている。

伝統文化体験等の実施方法については、今年度は昨年度と同様に対面で実施しているが、今後を考えるとオンラインを試験的に導入してもよいのではないかと考える。対面で直接子どもたちに指導することが最良だと思うが、華道であれば、必要物品等を学校に送付し、オンラインで講師が教え、子どもたちが目の前に用意された器と花で実際に作品を作っていく形は一つの方法としてあり得る。

【在田 教育長】

ICT に触れる時間が増えれば増えるほど、自然の大切さや実体験の大切さを実感するのではないかと考えており、教育課程において体験活動等は引き続き取り入れていくことが重要である。

【門川 市長】

ICT の活用や個別最適化を積極的に進めると同時に、生け花などの伝統文化を通じて自然や命を学んだり、体を動かしたりすることは非常に重要である。10 年前、キエフとの姉妹都市提携 40 周年にあたり、チェルノブイリ原発事故に係る研究所を訪問した際、東ヨーロッパの広範囲にわたって原発事故の影響があったのは野菜不足と運動不足であるとの話を聞いたが、同様に、新型コロナウイルスの影響による運動不足が子どもの学びと育ちを阻害すること懸念している。

学校視察をした際、感染対策のため子どもたちが小さな声で発表しており、聞く側も集中して一生懸命聞いている様子が見られたが、学校での感染対策が徹底されていることを

実感した。一方、このような状態が数年続くと、子どもたちが大きな声で話すことができなくなるのではないかと心配しており、大きな声を出せるような機会を作ることも必要だと考える。

文化庁が京都に全面移転するが、京都で育った子どもたちが世界を視野に入れるとともに、京都の文化と先人たちの生き方に軸足をおいて学んでいくことが重要である。そのような学びを学校から家庭に戻していくことも必要であり、そのための条件も整えていかなければならない。

#### 【奥野 教育委員】

若い世代はいとも簡単に動画を編集することができるなど、我々世代にはない能力を備えている。子どもたちは様々な可能性を秘めており、我々がこれまで思いもしなかったことを考え出すことができるため、ICT を活用するにあたり、使用方法など教職員から教えるべきことなどもあるが、子どもたちのやりたいことや、大人が考える ICT の活用方法にはない方法を子どもたちから引き出すような授業ができればよい。例えば、姉妹都市の学校とオンラインで繋がり、互いの都市の良さや同世代の世界の子どもたちがコロナ禍において何を考え、どのように生活し、どのように生きていくかを知ることは子どもたちの成長の起爆剤になるのではないか。

また、昨日、京都基本計画審議会に出席したが、ICT 活用の世代間ギャップが大きな課題であると感じた。京都市総体として ICT を進めていくことは必要であるが、特に年配の方など ICT が推進されることにより取り残される方がいないよう生涯教育等でフォローするとともに、ICT の活用によってよりよい生活が送れるような取組の提案があればよい。

さらに、画面越しで集中できる時間は 30 分が限界であると言われている。子どもたちの身体に影響を与えないような形での ICT 活用となるよう本市が率先して研究を進めていただきたい。

#### 【門川 市長】

京都市基本計画審議会については、コロナ禍での今後 5 年間の取組等について熱心の議論いただいた。世代間ギャップを生み出さないことは SDGs が掲げる誰一人取り残さない社会の実現のためにも重要であり、一人暮らしのお年寄りが急速に増えている中、ICT でつながることも考えられるため、生涯学習でも ICT 活用に関する取組を推進していただきたい。

一部の地域では体育振興会や自治会等が LINE でつながっているところがあるが、今後、危機管理や地域住民との連携をするにあたり、回覧板と LINE のそれぞれの良さを生かし、両輪で取り組んでいくことが大切である。また、自治会が高齢化している中、ICT を活用するためには若い世代の力が求められる傾向にあることを考えると、自治会等の世代交代にもつながる。

ICT の活用は全庁を挙げて取り組んでいきたいと考えており、教育委員会でも活用の推進をよろしく願います。

### (3) 閉会

#### 【在田 教育長】

本日はお忙しいところお集まりいただき、また多岐にわたる御意見を頂戴し感謝申し上げます。

令和3年度はGIGAスクール元年度となり、1人1台端末をどのように多角的に活用するかということが最重点課題だと考えているが、端末を単なる箱としないようにするためにはソフトが重要である。本市の財政状況は大変厳しい状況にある中、ご無理なお願いではあるが、AIドリルや授業支援ソフト、採点補助ソフト等の予算要求をさせていただいているところである。また、端末導入当初は、ICTを円滑に活用できるようサポート体制の構築等が必須であり、ICT支援員の確保や約2万台から約10万台に一気に増加した端末の維持管理等の体制整備のための予算についてもお願いしているところである。さらに、今回整備されたICT環境を学校全体の働き方改革につなげるためにも、今申し上げたICT支援員や端末の維持管理、さらには学校全体の校務支援のあり方は重要な点であり、予算に関わるものでもあるため、お取り計らいのほどよろしく願います。

奥野委員から提言のあったICTの推進に伴う世代間ギャップが生じないように生涯学習を進めるべきという点については、これまで学校教育におけるICT活用の在り方ばかりを考えてきたが、約10万台もの端末が学校に配備されるため、それを地域の生涯学習にどのように活かしていくかということも今後検討してまいらる。

大変な状況ではあるが希望も見える令和3年度になると考えており、引き続きよろしく願いたい。

#### 【門川 市長】

本日は貴重な御意見をいただき感謝申し上げます。

コロナ禍で毎日貴い命が失われ、先が見えない厳しい状況の中、やらなければならないこと、できることを徹底してやっていかなければならないが、教育委員会においては一人一人の子どもを徹底的に大切にする取組や京都ならではの生涯学習の推進など、学校現場をリードして精力的に取り組んでいただいております。

様々な課題や困りをおかえる子どもを大切にしていかなければならないが、ICTを活用した教育の推進などの取組により、誰一人取り残さない社会の実現に寄与するのか、あるいは新たな格差を生み出すのかという分岐点に立っているとも言える。ウィズコロナ時代において全員が社会の参画意識を持つことができるよう、私自身も決意を新たにしております。

この間、教職員の指導力や学校の組織としての取組が大切であると改めて感じたが、本日、皆様の御意見を聞き、本市ではそれが可能であると実感した。今年度、新型コロナウ

イルスの影響等で極めて厳しい状況にあるが、ICT 活用の推進にあたり、様々な研修などを体系的に取り組むほか、若い世代が学校現場で生き生きと頑張っておられる様子を聞き、本市は全国でトップ水準の教育を推進することができるという確信を持つことができた。

同時に、ICT を活用するためのソフトの重要性やサポート体制、教職員の ICT を活用した働き方改革なども必要であり、厳しい財政状況ではあるが取り組んでいかなければならないと考えている。また、文化庁の京都移転は、これは京都から文化で日本中を元気にしよう、文化で世界から尊敬される日本にしていこうという政府の意思や国民の声が表れていると思うが、教育においても茶道や華道等の体験活動を大切にしていかなければならない。

これらの取組は危機的な財政の中で推進していかなければならないが、一番大事なことは市民の皆様の豊かさを実現し、財政も持続可能なものにすることである。5年前と比較し、人口は横ばいであり、高齢化が進んできているが、納税義務者数は5%増となり、税収が9%増加した。ようやく経済が活性化してきた中、新型コロナウイルスの影響により財政状況が悪化することとなったが、これまで取り組んできたことに間違いはなかったと考えている。文化が大切にされたら経済が活性化する。これが京都の一番の強みであり、学校で華道や茶道を体験することは子どもたちの将来だけでなく京都のまちの活性化につながるだろう。

昔の話になるが、ワープロが普及した時代に、中学生が地域の高齢者にワープロ教室を開いたことがあり、専門家が教えるよりも子どもが教える方が分かりやすいと好評だったことを覚えている。学校に1人1台端末があることは家庭に影響を与えていると考えており、この事例のように、家庭において子どもが親や祖父母に ICT の使い方等を教えるようになれば良いのではないかと。

GIGA スクール構想による1人1台端末に係る取組が学校から社会や家庭を変えていけるものになることを期待している。

京都の教育は様々な危機のときに前進してきた。今、コロナ禍において尽力いただいているすべての方々に敬意を表するとともに、この危機の中で、より一層、一人一人を大切に、教職員の働き方改革を含め本市教育が前進できる機会となるよう、共に取組を推進してまいりたい。